

第2回“京都をつなぐ無形文化遺産”「地蔵盆」審査会次第

日 時：平成26年8月1日（金）

15：00～17：00

場 所：壬生寺 会議室

1 開会

2 挨拶

3 議事

「京の地蔵盆－地域と世代をつなぐまちの伝統行事」（案）について

4 閉会

【配布資料】

①次 第

②名 簿

③配席図

④資 料

資 料 1

「京の地蔵盆－地域と世代をつなぐまちの伝統行事」（案）

資 料 2

今後のスケジュール

参考資料1

第1回審査会摘録

参考資料2

「地蔵盆などの地域の伝統行事の現状と地域コミュニティ活性化への影響」
（2012年度「未来の京都創造研究事業」研究成果報告書より抜粋）

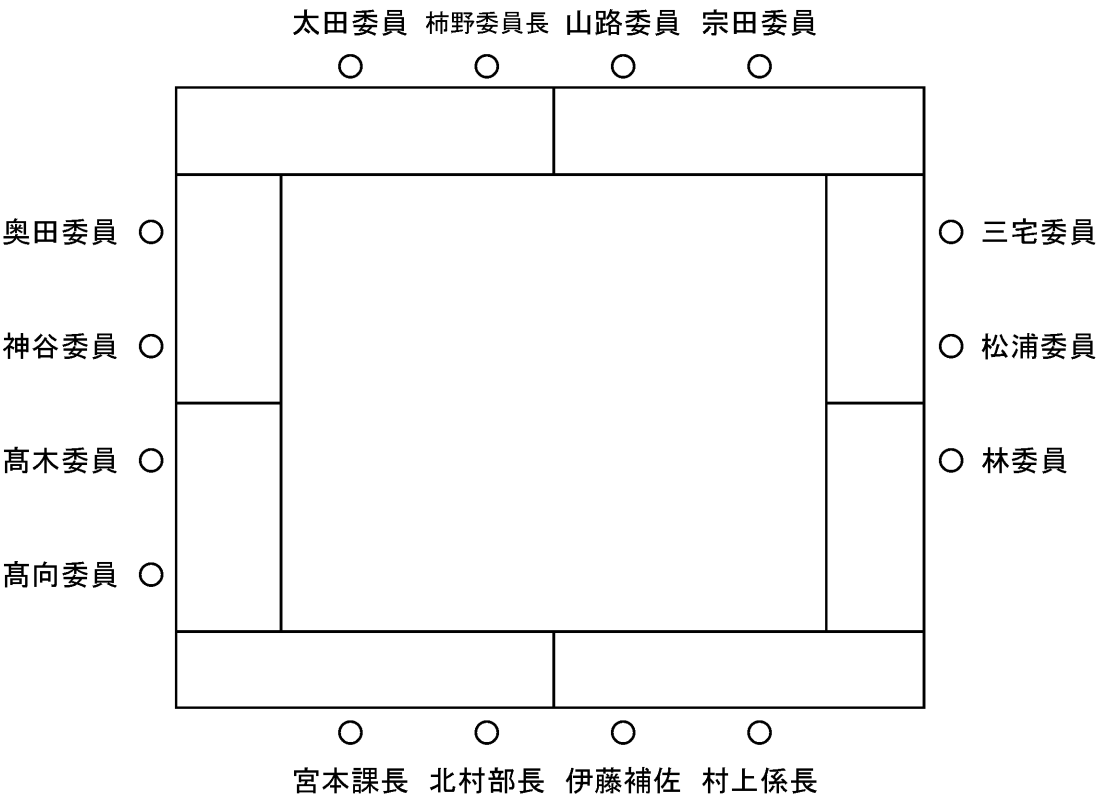
“京都をつなぐ無形文化遺産”「地蔵盆」審査会委員名簿

(委員長及び副委員長以外の委員は五十音順, 敬称略)

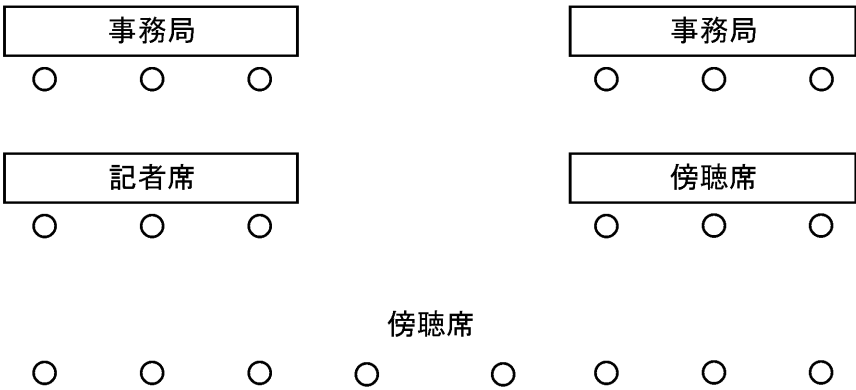
	氏 名	肩 書	出欠
委員長	柿野 欽吾	京都産業大学理事長	○
副委員長	熊倉 功夫	静岡文化芸術大学学長	
委員	太田 達	弘道館館主, 同志社大学文化情報学部特別講師	○
委員	奥田 末子	京都市地域女性会連合会常任委員	○
委員	神谷 潔	写真家	○
委員	高木 良枝	市民公募委員	○
委員	高向 正和	市民公募委員	○
委員	林 則子	市民公募委員	○
委員	真下 美弥子	京都精華大学非常勤講師	
委員	松浦 俊海	壬生寺貫主	○
委員	三宅 宏美	市民公募委員	○
委員	宗田 好史	京都府立大学教授	○
委員	山路 興造	京都市文化財保護審議会委員	○

第2回“京都をつなぐ無形文化遺産”「地蔵盆」審査会配席図

日時：平成26年8月1日（金）15:00～17:00
場所：壬生寺 会議室



出入口



京都をつなぐ無形文化遺産

「京 の 地 蔵 盆」

～地域と世代をつなぐまちの伝統行事～

(案)

1	選定にあたって	1
2	京の「地蔵盆」	3
3	「地蔵盆」はいま	9
(平成 25 年度京都市「地蔵盆」に関するアンケート調査結果概要)		

選定にあたって

毎年 8 月中旬から下旬にかけて行われる伝統的な民俗行事である「地蔵盆」。地蔵信仰という宗教的な性格を持ちながらも、町内安全や子どもの健全育成を願う町内の行事として、時代とともに変化しながら受け継がれ、地域コミュニティの活性化に重要な役割を果たしてきた「地蔵盆」は、京都をはじめ近畿地方で盛んに行われている。

火災や飢饉、疫病の流行等が頻繁に起こり、自らの生活を守るために地域の助け合いが極めて重要であった近世において、お地蔵さんの^{ほくら}祠やその周辺に見られる「町内安全」の文字が物語るように、地域の住民に安心と連帯感を与えてくれる存在としてお地蔵さんは^{まつ}祀られてきた。

江戸時代になって、人口が増加し、市街地の拡大とともに、町を単位とした住民自治が広がっていく中、お地蔵さんを^{まつり}祀る行事「地蔵^え祭」「地蔵会」（明治以降、盆行事の一つとして「地蔵盆」と呼ばれるようになった。）は、町内の主要行事の一つとなった。

しかし、明治初期における^{はいぶつきしゃく}廃仏毀釈の動きに伴い、路傍にあるお地蔵さんの撤去が進められた。これにより、市内の多くのお地蔵さんが撤去されたが、明治の中期以降に土中などから掘り起こされ、「地蔵盆」は復活することとなった。また、昭和の高度経済成長期には、新たに建設された新興住宅地やマンションにおいて、地域の行事として「地蔵盆」が積極的に取り入れられ、住民同士のつながりを深める役割を担った。

以降、「地蔵盆」は、子どもたちにとって夏休みの最後を飾る行事となり、お地蔵さんを飾り付け、お供えをして祀り、その前で子どもたちが集まり遊ぶというスタイルが一般的となった。また、子どもだけでなく、大人も積極的に参加することで、世代を越えた交流の場となり、さらに、「地蔵盆」の開催に向け、町内の住民が力を合わせ、話し合いながら準備することは、町内の連携や協力体制を強めることとなった。

このように、町内の住民同士が顔を合わせ、交流を図る機会となっている「地蔵盆」は、近年において、新しく住民となった方がその町内の住民の方々と交流できる貴重な場としても機能し、地域コミュニティの活性化、そして、防災をはじめする地域力の向上に大いに役立っている。

しかしながら、子どもの減少や職住分離をはじめとする生活様式の変化などにより、行事自体が簡略化・衰退しているところも増えてきている。

こうした現状を踏まえ、世代を越えて京都のまちに脈々と受け継がれてきた民俗行事であり、町内の年中行事となっている「地蔵盆」の果たしてきた役割を再認識し、時代の変化に対応しながら引き継がれるよう、「京の地蔵盆ー地域と世代をつなぐまちの伝統行事」を“京都をつなぐ無形文化遺産”に選定する。

京の「地蔵盆」 ～行事内容など～

「地蔵盆」で行われる行事内容は地域によって様々ですが、多くの町内で行われている（行われていた）行事内容を踏まえ、一般的な「地蔵盆」の内容についてまとめてみました。

京の夏の風物詩「地蔵盆」

平成25年度に京都市が実施した「地蔵盆」に関するアンケート調査（結果概要は8ページ以降参照）によると、同年に「地蔵盆」（「大日盆」などの盆行事も含む。）を実施した町内は回答全体の約8割となっている。8月後半、まちのあちらこちらで見かける「地蔵盆」は京の夏の風物詩となっている。

<開催日>

「地蔵盆」は、じぞうぼさつ地蔵菩薩の縁日である旧暦7月24日、もしくは、その前後のほか、最近では、参加する人たちの都合に合わせ、多少日程をずらして土日に行うところが多い。また、てんどうだいにちによらい天道大日如来を祀っている町内では、大日如来の縁日である旧暦7月28日、もしくは、その前後に「大日盆」を行うところもあるが、それらも「地蔵盆」として行うところが多い。

様々な行事を盛り込み、2日間やそれ以上の日程で行われる町内もあるが、子どもが少なくなったことや大人の都合がつきにくくなったことから、最近では一日で終わるところが多い。

<開催場所>

お地蔵さんを祀った祠の前が比較的多い。その他、個人宅や駐車場などの空き地、道路上、集会所、公園などで実施されている。

<運営主体>

町内会或いは町内の子供会などが運営主体となって、町内単位に行われることがほとんどである。運営の担い手は大人が中心であるが、鉦や太鼓などで行事の開始を知らせる役割など、子どもも「地蔵盆」の運営に参画することで、世代間の交流が図られている。

また、最近では、「地蔵盆」を開催できない地域の住民のために、学区の自治会館などで「地蔵盆」を開催し、参加してもらうといった取組もある。

町内で協力して行う「地蔵盆」

<お地蔵さんのお化粧など>

「地蔵盆」が近づくと、町内の人たちは、お地蔵さんを祠から出して、新たに彩色する「お化粧」を行い、新しい前掛けを着せる。

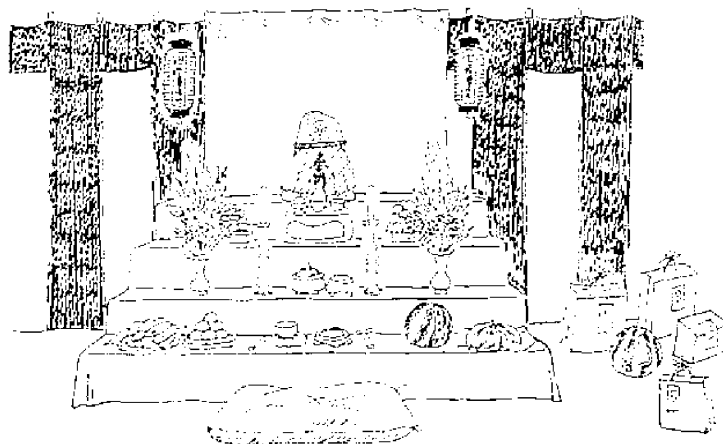
お地蔵さんがない町内は、寺院から借りるか、或いは、仏画を使用するかなどしていることが多い。



<供物などの飾り付け>

町内の人たちからお供えを集め、お地蔵さんを祀る祭壇に花や供物、お札じぞうばた（地蔵幡）などを飾り付ける。火を灯した提灯に似ているところからホオズキをお飾りの花として使うことが多い。

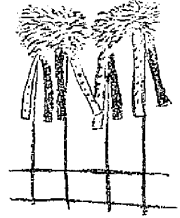
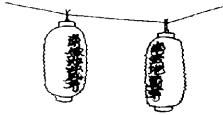
供物としては、紅白の餅や落雁らくがん（白雪糕）はくせんこうといったお菓子、果物、精進物のお膳などが供えられる。



<会場まわり>

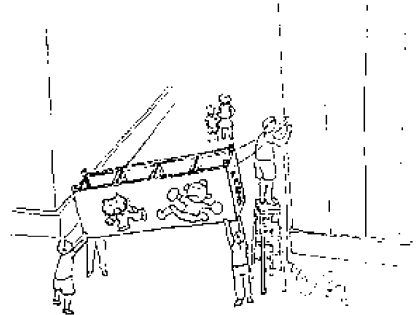
会場まわりはとうろう 灯笼やあんどん 行燈、提灯などで飾られる。

子どもが生まれると、健やかな成長を願ってその子の名前を書いた提灯が作られ、その子が「地蔵盆」に参加しているあいだ毎年飾られる。また、青竹ののぼりを立てるところもある。



灯笼や行燈にローソクを立て、夜の明かりを楽しむこともある。また、「地蔵盆」の会場の入口に吊るす大きな行燈もある。

行燈の絵を子どもたちが描くなど、大人だけでなく、子どもも「地蔵盆」の準備に参加することにより、世代間の交流が図られている。



なお、最近では見られなくなったが、陶磁器や糸などの日用品を使って人形などをつくり、情景をしつらえる「作り物」もある。



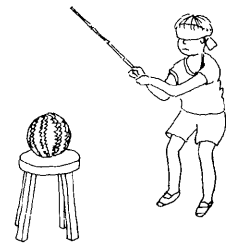
世代を越えて交流を図る「地蔵盆」

＜数珠まわしなどの伝統行事＞

「地蔵盆」は、僧侶による読経や法話が始まるところが多い。町内によっては、子どもたちが直径2～3メートルの大きな数珠を囲んで座り、大人もその輪に加わりながら僧侶の読経にあわせて順々に回す「数珠まわし」（百万遍念仏の一種で、「数珠繰り」ともいう。）が行われる。



こうした伝統的な行事だけでなく、お菓子の配布や手料理の振舞い、ゲーム大会、スイカ割りなど、子どもを主体とした様々な行事が行われる。



＜お菓子配り＞

子どもたちが喜ぶお菓子配りは、ほとんどの「地蔵盆」で行われている。そこに集まり、学年の違いを越えて隣近所の友達と一緒に遊んだ子どもの頃の経験は、「地蔵盆」の楽しい記憶として、大人になっても残り続けるものである。

＜手料理の振舞い＞

お菓子配りのほか、昼食或いは夕食として町内の世話役による手料理が振る舞われることもある。また、屋台が設けられるところもある。

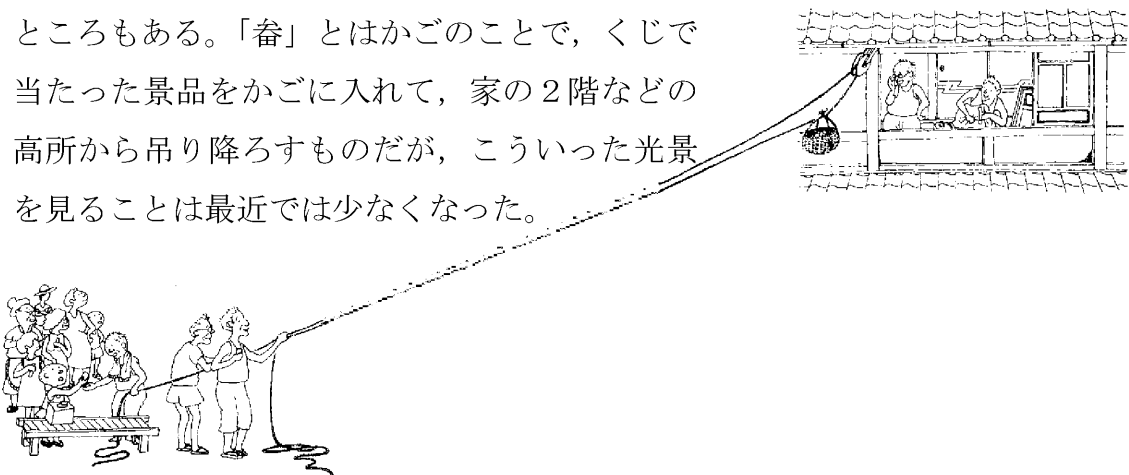
＜遊びのイベント＞

ゲーム大会など子ども向けの行事がプログラムに並ぶ。夜になると花火大会や盆踊り、映画会などが行われるところもある。また、大人だけの交流の場がもたれるところもあり、町内における貴重なコミュニケーションの機会ともなっている。

＜福引＞

子どもにとって最大の楽しみである福引は、主にプログラムの終盤に行われる。

「^{ふご}畚おろし」といった昔ながらの形式で行うところもある。「畚」とはかごのことで、くじで当たった景品をかごに入れて、家の2階などの高所から吊り降ろすものだが、こういった光景を見ることは最近では少なくなった。



＜供物のお下がり＞

お菓子などの供物は、お下がりとして子どもたちに配布される。夏の終わりに体力を消耗した子どもたちの栄養を補給しようと落雁を配ったとも言われている。

町内を見守るお地蔵さん

「地蔵盆」が終わると、祠から移動させたお地蔵さんは元の場所に戻る。

町内の住民は、日頃の感謝の気持ちを込めながら、お地蔵さんの前で手を合わせ、祠を綺麗に掃除し、新しい花を活ける。大都市でありながら、まちの辻々で見かけるこうした光景は京都ならではのものである。

地域コミュニティの活性化に「地蔵盆」が重要な役割を果たしていることから、最近では、地域住民が主体となって「地蔵盆」についての調査・研究※が進められています。

※ ふるさとの良さを生かしたまちづくりを進める会（山科区・平成 24・25 年度）、

上京区成逸住民福祉協議会（上京区成逸学区・平成 25 年度） など



「地蔵盆」はいま

(平成 25 年度京都市「地蔵盆」に関するアンケート調査結果概要)

“京都をつなぐ無形文化遺産” 「地蔵盆」の選定に当たり、京都市内における実施状況を把握するため実施した「地蔵盆」に関するアンケート調査の概要を掲載する。

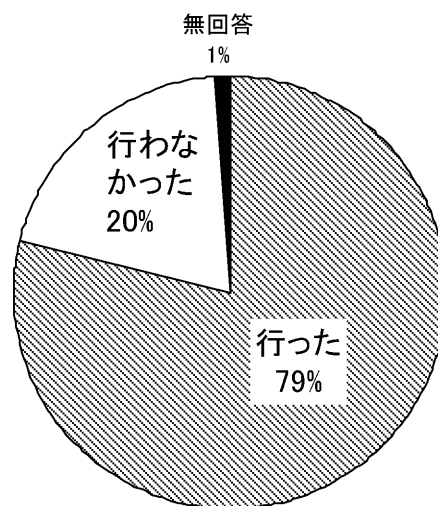
＜調査の概要＞

- ・調査対象 自治会長・町内会長など
- ・調査方法 書面によるアンケート調査（郵送回収）
- ・調査期間 平成 25 年 9 月上旬～12 月末
- ・調査対象数（配布数） 6,627 件
- ・回収状況 有効回収数 3,684（有効回収率 56%）

＜調査結果の概要＞

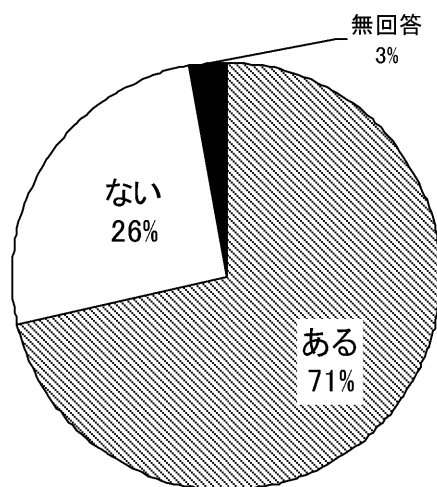
「地蔵盆」の開催状況

平成 25 年度に「地蔵盆」を行った自治会・町内会は回答全体の 79%となっている。



お地蔵さんの有無

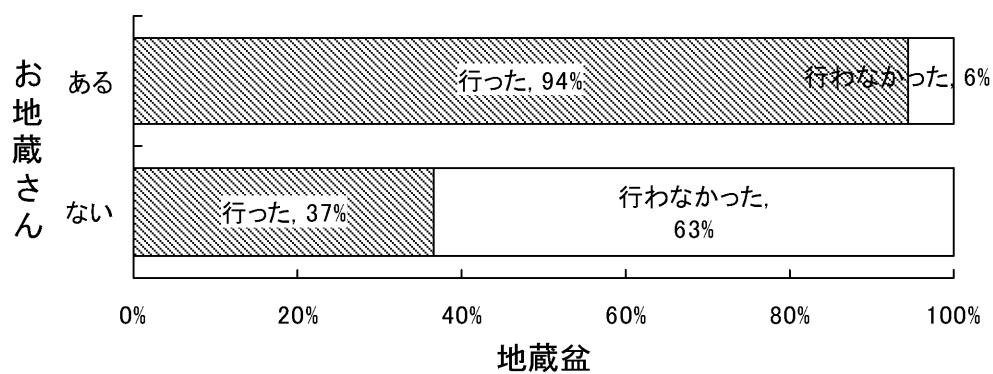
お地蔵さんがある自治会・町内会は、回答全体の 71%となっている。



お地蔵さん有無別の「地蔵盆」開催状況

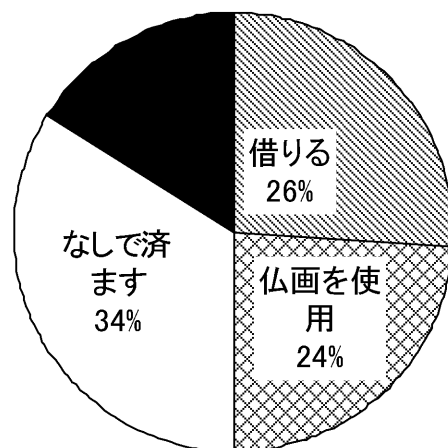
お地蔵さんがある自治会・町内会では、ほとんどが地蔵盆を行っている (94%)。

お地蔵さんがない自治会・町内会で「地蔵盆」を行ったところは 37%となっている。



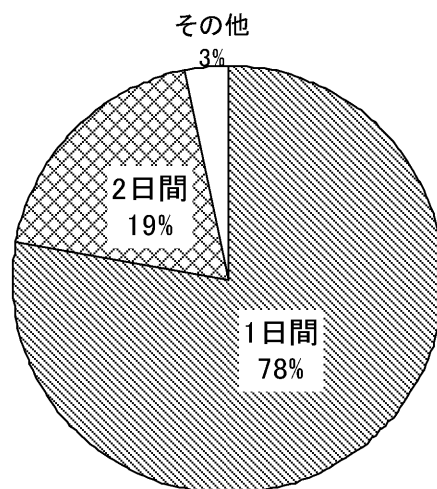
お地蔵さんがいない場合

お地蔵さんはなくても「地蔵盆」を行ったところでは、「お地蔵さんを借りてくる」が 26%、「仏画を使用する」が 24%、「その他（なしで済ます）」が 34%となっている。



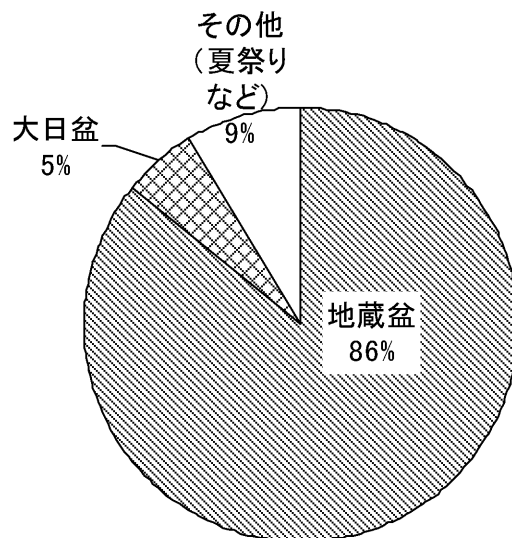
開催日数

「1 日間」が 78%を占め、「2 日間」は 19%となっている。



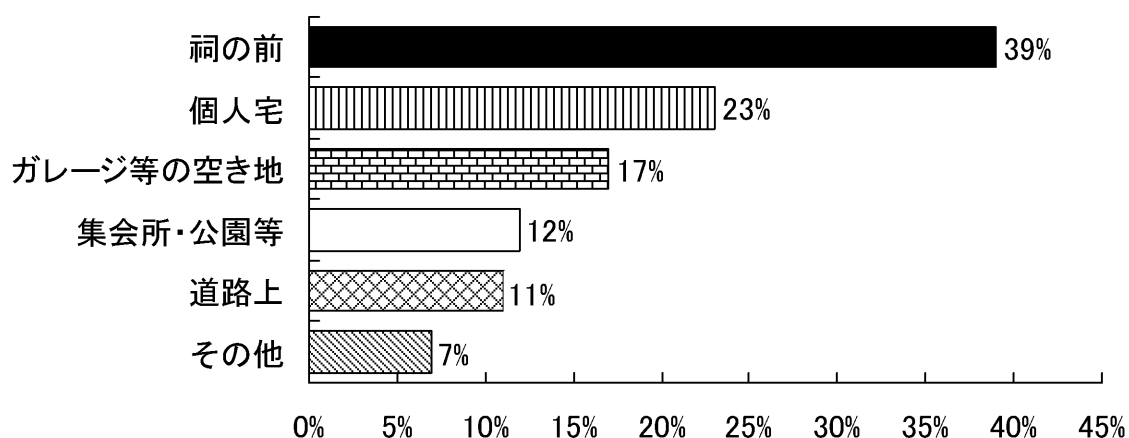
「行事の名称」

行事の名称は、ほとんどが「地藏盆」であったが、「大日盆」も 5%ある。



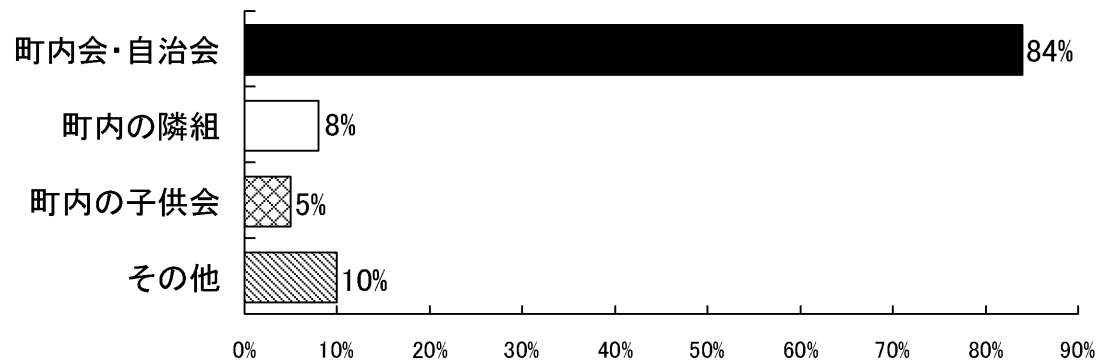
「地藏盆」の開催場所

「祠の前」が最も多く (39%), 「個人宅」 (23%), 「ガレージ等の空き地」 (17%), 「集会所・公園等」 (12%), 「道路上」 (11%) となっている (複数回答)。



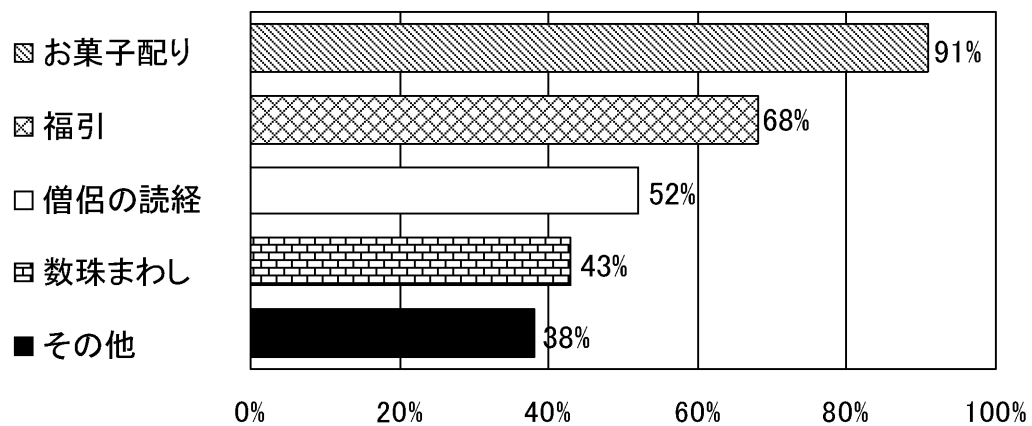
「地蔵盆」の運営主体

「自治会・町内会」が84%を占める（複数回答）。



行事プログラム

お地蔵さんの飾り付けやお供えのほか、「地蔵盆」のプログラムで最も多かったのは「お菓子配り」（91%）で、続いて、「福引」（68%）となっている（複数回答）。



“京都をつなぐ無形文化遺産”「京の地蔵盆」
今後のスケジュール

平成 26 年 5 月 30 日（金） 第 1 回審査会（於：壬生寺）

8 月 1 日（金） 第 2 回審査会（於：壬生寺）



8 月下旬～9 月下旬 パブリックコメント※
※次の選定候補についての市民意見を同時に募集



10 月 第 3 回審査会



審査会から市長に答申



「京の地蔵盆」選定



平成 27 年 3 月 「地蔵盆」を紹介する冊子「京の地蔵盆（仮称）」の発行

第 1 回 “京都をつなぐ無形文化遺産” 「地蔵盆」 審査会摘録

日 時：平成 26 年 5 月 30 日（金）午後 3 時 00 分～午後 5 時 00 分

場 所：壬生寺 会議室

1. 開 会

2. 挨 拶

門川・京都市長：京都のまちで一番の誇りは何か、一つ挙げて欲しい、とテレビや雑誌の取材でよく尋ねられる。一つ挙げるのは難しいが「京都の路地を歩いてください。あちらこちらにお地蔵さんがあり、水と生花が供えてある。過去の遺物としてあるのではなく、今もきれいに清められて、大切にお参りされている。100 万都市でこんなところは他にないだろう。」と答えている。柿野先生には 2～3 年前に「国宝も重要文化財も、伝統産業も大事だが、認識していない大事なものがまだある。それらをどう再認識し、つないでいくかが大事だ」と言われ、たいへん共感した。京都市は、定義や概念、保存団体が不明なために現行の法令上、文化財の指定が困難なものでも、未来にわたって大事にしなければならないとして、「京都をつなぐ無形文化遺産」制度をつくり、「食文化」「花街」を選定してきた。今回の審議は「地蔵盆」である。食文化、花街以上に、京都に暮らす人々の身近な存在といってもいい。京都の宝物ともいえる地蔵盆の価値を再認識して、地域のコミュニティの活性化につなげ、地域ぐるみで子供を育てていきたい。先人の願いや心をしっかりと未来に伝えていくこときっかけとしたい。

柿野委員長：私の子供のころも、地蔵盆は夏休み最後のイベントで、胸躍らせて参加していたものだ。身近な風習で、子どもを育む機能があると同時に、それぞれの町の核になる存在である。特に、新興住宅地が外縁部に広がり、まちなかにはマンションが建ち、少子高齢化が進む時代だからこそ、京都市民としてきちんと受け継いで未来につないでいくことが大事だ。京都の伝統的な風習がこれからも 100 年、200 年と続いていくように、みなさんの知恵とご協力を賜りたい。

3. 制度説明（事務局——略）

4. 資料説明

○地蔵盆の歴史と民俗／地蔵盆に関するアンケート調査の結果（事務局 ——略）

5. 事例報告

○山科の地蔵盆について（ふるさとの良さを活かしたまちづくりを進める会 別紙参照）

浅井氏：調査の結果から、ふるさとの会は今後 2 つの方向での取組を考えている。一つは、この継続調査を行って、変遷を追っていきたいということ。もう一つは、各地の地蔵盆の活性化に向けて、この調査成果を生かし、町内への支援をしていききたいということ（具体的にどんな支援ができるのかは検討中）。

ご協力いただいた自治連合会役員や区民の方々に報告するため、「山科の地蔵盆調査」報告会を 6 月 13 日に開催する予定。地蔵盆はだいたい同じ日なので、今まで、よそはどういう地蔵盆をしているかがわからなかったが、これを交流の機会にして、今後に生かしてもらおうと思う。審査会委員のみなさんも時間の許す限り、足をお運びいただきたい。

6. 議事

(地蔵盆の本来の意味)

山路委員：大きな命題として“京都をつなぐ無形文化遺産”を何のために選定するのか、という点がある。さきほど現状の報告があったが、やはり成り立ちや経緯など基本的な事柄は大事だ。

「地蔵盆」という用語は明治以降しか出てこない。それ以前は地蔵祭、地蔵会（じぞうえ）。だから基本的に、24日の地蔵尊の縁日に行われる行事だった。そして、山科のような村落地域と、京都のまちなかではやり方が違うということが重要。

京都のまちなかでは、通りと通りの間に町が形成されたのだが、町の両側にはほとんどの場合木戸があり、夜間になると閉ざされた（それ以後の通行はくぐり戸から）。すぐ横に木戸番所があり木戸番が住み、お地蔵さんがあり、ごみ入れが置かれていた。町の人たちは賽の神の系統としてお地蔵さんを祀り、そのごみ入れを使った。木戸の両側を閉ざしてしまうと（何時に開閉するかは自分たちの町掟の判断）、通りは共同体の共同物であり、自分たちの家の延長だった（京都独特の庭掃きなどが起こってくるのは、自分たちのものという意識が強かったから）。個人の仕事場の延長であり、子どもたちの遊び場であり、地蔵祭の場所でもあった。

地蔵祭は必ず子どもたちでやった。それを手伝うのが木戸番や、町会所の人だった（お地蔵さんを祀っていないところでは大日さんを祀るから、地蔵盆と大日盆（28日が縁日）は同様に扱ってよい）。町ごとに作り物など趣向が違うかもしれないが、あくまでも木戸と木戸に囲まれた町共同体という空間で成立していた祭り。これが本来の地蔵祭を成り立たせていた根本的なあり方である。

ところで、こういう祭りは社会が変化すれば形態が変わる。明治5年に木戸が取り払われ、誰もが自由に行き来できるようになり、道路は公共のものになり、町のものではなくなる。自分たちの道路では、自分たちが自由に使っていた。道路がなくなれば、子どもたちは自分たちの遊び場を失う。ならば、どこへ行くか。共同体の中には寺があった。境内は町共同体のものだから、そこで地蔵祭もできた。戦後しばらくはそれでよかったが、その後、広場がどんどん駐車場に変わる。お地蔵さんはかつての木戸のそばに祀られたままでも、子どもたちの共同体の場はなくなっていく。そういった社会的変化の中で、地蔵祭のありようも変わっていく。

もう一つ大きなことといえば、江戸時代は寺子屋はあったが、学校はなかった。明治になり学校ができる。すると、学区単位での自治会組織ができたりして、町共同体という組織がばらけていく。地蔵盆が行われる8月24日はちょうど夏休みの最後で、子どもたちの学校生活のサイクルの中でも非常にいい時期にある。京都の場合は、伝統的な行事である地蔵祭があったので、共同体のありようとしてうまく残ったが、それが無い地域ではどうしたのか。自治体の祭り（夏祭など）をやる。そして、本来は自主的に子どもたちがやらなければいけないのに、明治以降は木戸番がなくなったこともあり、親たちが表に出てやるようになってきた。「盆」という形で。

守るべき無形遺産として、どのようにうまく共同体のありようとドッキングさせていくか、将来的に伸ばしていくかが大きな課題だろう。お地蔵さんのない新興住宅地では壬生寺から借りるなどして、できるだけ地蔵祭の延長としてやっていくのが京都の伝統ある民俗行事のありかただろう。

山科の調査で、道路でやっているところは40%ほどあるというが、どんな形でやっているのか。

浅井氏：祠やお地蔵さんを動かさない場合はその前にテントを張って、当日は一日や半日、交通規制をする。公園や空き地でやるところも結構あり、その時はお地蔵さんを移動させてお祀りする。どちらかといえば早くから開けた北部に対して、南部はもともと田んぼが多くて最近トイレ付きの公園ができており、普段からその公園にお地蔵さんを設置している例が多い。そこはテ

ントを張るだけで地蔵盆ができる。

山路委員：どういう共同体の中で地蔵盆をやっているのか。

浅井氏：山科は、人口ラッシュが始まる前から、家の中でお地蔵さんを祀り、その家と周辺の家で地蔵盆をしているというところがある。昔の集落単位で地蔵さんを祀るという古い形態も残っている。ただし、人口急増のあとは町内単位での実施が主流になっている。子供会という場合もある。山科に引っ越してきて、子どもたちのために何かをしてやろうという思いから始める、ということも多いだろう。

（地蔵盆の開催場所と主催）

山路委員：京都では、町共同体で地蔵盆をする例はまだまだ残っていると思うが、道路でやっているのはどのぐらいか？

柿野委員長：アンケートでは、道路上は 10%だが、一方、「地蔵堂の前」が一番多くて 39%。この「地蔵堂の前」が道路を指すのかどうかまでは分からない。

山路委員：まちの中心部では道路を規制してやるというところはないだろう。

柿野委員長：上京区では、31%が地蔵堂の前で、道路上は 3%となっている。京都市内は幹線道路以外の道路はかなり狭いので、そういうところではまだまだ、ある時期の一日あるいは半日、お地蔵さんのために場所を設けるということもあるのではないかな。

山路委員：どんなに狭い道路でも、道路を使うからには警察もうるさいのでは。

事務局：警察は、祭礼や地域の伝統行事に対してはおおらかで、祭礼のときは道路の真ん中にテントを張ってゴザを敷いて、ということもみられる。

山路委員：届け出はいるはず。そういうことをどのぐらいのまちがやっているのだろう。成り立ちからいえば子どもが中心となってやってきた行事だが、今は子ども中心と言っても親が中心。一生懸命、お菓子で子どもを釣って、というのは本来の姿ではない。

奥田委員：私も山科だが、昔は子供会があって、上級生に行燈の作り方を教えてもらったりして、異年齢でも仲良く一日二日は遊ばせてもらったものだが、今は子供会が衰退したから、というのが原因の一つになっていると思う。

山路委員：しかし、昔、親が関与したのは、はじめて参加するときには赤い提灯に子どもの名前を書くぐらいだった。

真下委員：子供会という組織は戦後にできたものだから、その前はどうか、も重要。私は2年前に4か所で聞き取り調査をし、子供会がさかんだった頃の状況、戦前の状況を聞いている。

（地蔵盆の要素）

山路委員：笹竹を立てて、子どもたちが地蔵祭の歌を歌ったという例は、聞かれたか。

真下委員：上京のあたりでは知らない。

山路委員：堀川のあたりなのだが。田中緑紅さんの本に写真が載っている。歌そのものも録音して『民謡』の中に収録されている。

柿野委員長：笹竹についてもう少し詳しく教えてほしい。

山路委員：私は東京出身なので京都のことを詳しくは知らないが、七夕のような長い笹竹を持って歩く。

奥田委員：テントの前に大きい笹竹を立てかけていた。

山路委員：赤い提灯は今でもやっている。

奥田委員：提灯は、男の子と女の子で色を分けることもある。

浅井：山科でも、赤白の幟をつけた笹竹を立てているところはある。「山科の地蔵盆」報告書 P14 の写真を参照してほしい。また次のページ写真は、地蔵盆で子どもたちが交通安全の看板（一年間

道路に掲示)を描いているところ。

山路委員：地蔵盆でどういう飾りをしているか、という調査も本当はやってほしかった。こういう京都の盆行事は、国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」(通称：選択無形民俗文化財)になっている。選択されると調査をしなければならないので、昭和 52 年指定の直後に私を中心となって一斉に調査し、国から報告書が出たが、今はどうなっているのかが知りたい。

柿野委員長：子どもの交通安全を願うというのは、まさに現代版地蔵盆の一つの祈りだと思う。事務局資料では、現代の地蔵盆の要素が一覧になっているが、これらのほかに、抜けている行事はないだろうか。私も子どものころは地蔵盆を楽しみにしていたものだが、地獄絵が掲げられていたのが恐ろしくて印象に残っている。

(地蔵盆の菓子)

太田委員：お地蔵さんは賽の神だが、寺の所轄がはいっているところは地蔵信仰もはいっている。まず、山路先生ご指摘の「地蔵盆」という言い方がいつからか、という定義をすることが一番重要だろう。さらに、村落型なのか、都市型なのか、という仕分けも必要だ。そして、コミュニティケアの重要な装置だという点を再認識すること。

実は私は、若狭、近江、大和、摂津、河内の地蔵盆の違いを比較して回ったことがあるのだが、開催場所を大まかに言えば、若狭は地蔵堂形式。近江は寺やエリアの集会所が使われている例が多い。奈良はほとんど寺が主催でやっている。河内では盆踊りと一緒になって小学校でやっている。一番おもしろいのは摂津国の神戸あたりで、商店街主導になっていて、お菓子を誰にでも配る。

結縁日がなぜ 8 月 24 日なのか、という疑問に答えるには、食という視点が大事だろう。供物は江戸時代の記録にもすでにあるが、菓子配りはない。しかし京都では、白雪羹(はくせんこう)という、中に水飴を入れた円をかたどった紅白のお菓子が配られていた。私は菓子屋から入ったのだが、30 数年前は、80 ぐらいの町内の地蔵盆の法要を受けていた。なぜ同じ日なのかと恨めしいぐらい、毎年忙しかった。

白雪羹は栄養補給剤だと思っていただくと分かりやすいと思う。発祥は、15 世紀の山科本願寺の蓮如ではないかと私は思っている。もともと説法のときに渡す重要なものだった。それが、地蔵盆に導入されて、8 月末の夏の暑い盛りに、子どもたちがふらふらになってくるころ、子どもが病気にかかっても死なないう、滋養をつけるための菓子となったようだ。堀川高辻あたりの天童社というところに、市内で配っていた落雁の一番古い木型が残っており、1750 年ごろまではモノとして遡れるが、それ以前は文献でしか分からないらしい。ところが、私が菓子屋をやっていたころの昭和 58～59 年ごろ、この白雪羹の注文がまったく来なくなった。調べてみると、京都市内でデリバリーをかけていたマクドナルドのお子様セットに負けたらしい。白雪羹は甘すぎてあまり美味しくない。お子様セットはお土産(おもちゃ)もついているから役員にとっても楽だし、おしゃれな感じがする、ということで一気に変えられてしまった。滋賀県では、平和堂という地域の大手スーパーがカルビーなどのメーカーに、地蔵盆のお菓子セットを作らせていたりする。

お供えの中には、ほおずきもあった。ほおずきは灯明の意味だろう。大日系の紙の幡のお下が(供物)もあった。

食の視点とはじめに言ったが、祭りにとって共同調理、共同飲食は大事な要素ではないか。祭りでもお供えを上げてから下がるまで、コミュニティにおける秩序の序列があり、11 時になれば大人の世界になるため大騒ぎしてよいことになっていた。無礼講で、言いたいことが言える場所だった。今は地域での宴会がなくなり、近所づきあいが疎遠になって、世知辛い事件が起

こってきいているような気がする。

山路委員：京都の場合は、行事食という独特のものがあつた。共同体のもう一つの祭りであるお火焚き（11月）では、お火焚きまんじゅうとおこし、みかんが、紙袋に入れて配られるというのは知っていたが、地蔵盆については、今日初めて聞いた。

太田委員：落雁はいろいろな型があるが、白雪羹は一丁型で、作るときは1回で何個も作るな、心を込めて1回1回押せ、と言われたものだ。1日で何千個も作った。

山路委員：滋賀県の平和堂は、地蔵盆用のセットを売っているが、あれは京都にはないな、と思っ

ているのだが。

林委員：昔は、京都駅前の丸物にあつた。7階フロア全体が特設会場になっていて、そこに役員は買いに行ったものだ。

（地蔵盆の意義とは）

真下委員：近世までの京都は、それぞれの町が職住一致の町だった。お地蔵さんが地縁の象徴として存在し、今でもお地蔵さんの祠のあたりは町内安全と刻まれている場合が多い。自分たちの町内のお地蔵さんなのだ、という高い意識で地蔵盆が行われている。

ご指摘のとおり、夜の宴会も住民自治の場としてはたいへん意味があつた。2年前の調査報告では、ある町には明治になってからの町式目があり、中でも新年の宴会や、春秋の千度参り、地蔵会の記述が出てくる。予算は町会費からまかなわれる。その住民自治の有様は、他の地域と比べても特徴的だった。

ちなみに、ほおずきの話では、かちんかちんになるぐらいまで、年が明けるまでとっておき、それを丸呑みすると安産になる、という言い伝えもあるらしい。

松浦委員：地蔵会というのはお地蔵さんを祀る祭礼で、明治以降、だんだんと地蔵盆と呼ばれるようになり、今に至る。今、町内で地蔵会、地蔵祭という呼び名はまずない。8月9日～8月16日の盂蘭盆（サンスクリットのウランバナの訳語。短縮して「盆」）が終わってすぐにお地蔵さんの縁日が来るので、特にこの8月の終わり、子どもたちも田舎から海山から戻ってくるというタイミングのよい時に、町内の役員がいろんな趣向を凝らして行う。子どもの縦、横のつながりもできるし、大人も夜には打ち上げをして楽しむ。向こう三軒両隣の関係が大事なことで、特に災害時には普段のこういった隣人関係が発揮されることだろう。少子高齢化により、子どものいない地蔵盆などは本当にさまにならないが、事実、対象となる子どもが一人もいない町内が続出している。地蔵盆を中止、あるいは休止する例もあり、大人だけで形だけでも行うという町内もある。

今日、『地蔵盆の手帖』を配布したが、これは、さまざまな寺への問い合わせ——町内の地蔵盆を継承していた古老が少なくなり、新しい町内の会長さんからどのように地蔵盆をやるべきかが分からない、という問い合わせがよくあつて、ガイドブックがあればいいなと考えていたところに、小さい時に楽しかった地蔵盆のことを語り伝えていきたい、という趣旨で『京のおもいで絵ばなし/地蔵盆』を作られた松浦忠平さんと巡り会い、企画がまとまり発行したもの。さきほど丸物の話が出たが、壬生寺近所にも、地蔵盆のお菓子を手広く扱う会社や、おもちゃを扱う会社がある。特に今年の地蔵盆は、それらの会社と当寺がタイアップして、地蔵盆のキャンペーンをしようと考えている。

神谷委員：うちはキリスト教徒だから、地蔵盆に参加せず、寺のお参りだけで済ませたことがある。地蔵盆は宗教行事ではあるが、宗教色はきわめて薄く、堂々と町を上げてやっているの

で、関東の人にはたいそう驚かれる。京都独特の宗教性の薄い行事を地域がしっかりやっておられるのは大事なことだ。

写真を撮って回っていて危惧するのは、子どもが減っているために地蔵盆に参加する大人の率も減ってきていること。例えば 70 軒の町内があるとして、子どものいる家庭が 10 軒として、役をしていて出てくる人が 10 軒で、お供えを持ってくる人が 30 軒くらいかと思う。40 軒の家はまったく出てこれない。

山科の例をみていて、台所事情が気になった。費用はどこから出しておられるのか。町内会がいくらか出し、子供会の会計からもいくらか、子どもから一人いくらかと会費をとるところもあるし、あとはお供えだろう。いろいろ合わせてバランスよくやっておられると思うが、今は町内会加入率も上がらないと聞く。関わろうとしない 40 軒の方々に、地蔵盆の意義をどう伝えていけばいいのか。これからの地蔵盆は、「地蔵盆」の看板は掲げたままで、子ども対象でなく、一人暮らしの高齢者にこそ率先して参加してもらい、ということを考えていくべきではないか。

高木委員：私が生まれたのは、伏見区の西はずれの羽東師で、さきほどの定義で言えば、村落型の地蔵盆があった。昭和 50 年代に建てられた新興住宅に住み、旧集落の地元の地蔵盆に参加させてもらっていた。私の時代の地蔵盆は、マクドナルドのセットの配布もあったが、さきほど言われた歴史とも少し違った形で存在していた。地蔵盆は、本当に新住民と旧住民をつなぐ装置になっていた。時代によって形を変えながらも、「つなぐ」という言葉が使われているとおり、地域をつなぐ、世代をつなぐ、いろんな違いをつなぐものとして、地蔵盆が身近なものであることを京都市民が実感できれば、と思う。

高向委員：地蔵盆はあくまでも子ども中心であり、子どものいない家庭には縁遠い。では大人が地域に溶け込むためには、地蔵盆などはどうあるべきか。私もそういうことを考えるきっかけになれば、と思い委員公募に申し込んだ。みなさんの話を聞くと、私もそうだが、家には寝るために帰っているだけだ。現役世代は、実際に住む町にいる時間と、勤める町で過ごす時間を比べると、自分の町にいる時間のほうが圧倒的に少ないと思う。そもそも地域に対して、コミュニティを形成する意義とかを感じていないのではないか。防災や相互扶助の観点からも、もう少し考えていかなければならないと思う。

（“京都をつなぐ無形文化遺産”「地蔵盆」選定イメージ）

浅井：6 月 13 日の「山科の地蔵・地蔵盆報告会」のパネルディスカッションでは、厨子奥北部でやっておられる方に報告してもらうのだが、明治 20 年ごろからやっていた伝統的な行事が残っている。山階南学区というのは、昔は田んぼばかりだったところに新興住宅地が建ったところで子どもたちにふるさとづくりをしようということで行われている地蔵盆だが、1 日目は各町内（9 か所）がそれぞれに地蔵盆をし、2 日目は合同で集まって盆踊りや夜店を出している。そんなふうには、古いところと新しいところの典型的な例を報告してもらう予定。

費用に関しては、基本的には町内会主催だから自治会費を使っているが、それだけでは回らないので、寄付を募って賄っている。町内会と分離して地蔵会を作り、そこでやっていた時期もあったが、子どもが減ってきたので立ちゆかなくなって、今では町内会が費用の工面をしながら、寄付を得ながら、なんとか運営しているところが多い。

山路委員：こういう地蔵盆を宗教行事と考える京都人はいない。やはり共同体の精神的紐帯をなす習俗なんだと理解している。

太田委員：先ほど地蔵盆の要素としていくつか抽出されたが、供物が一番重要な要素と思う。また提灯だが、私が見るかぎり、京都の提灯は他府県よりかっこいい。大阪、兵庫の提灯はピンクや水色で、どうもぴんとこない。滋賀県の京都に近いエリアや若狭は京都に似ていると思うが、ただ京都府南部の長岡京から以南はだんだん違っているようだ。そして、大日なのか地蔵なのか、ということが混乱している。お参りに来られる寺の関係もあるだろう。日蓮宗系の扶持布施は

集めにくいというが、私も北区、上京区、中京区での経験から、十五本山との違いを感じる。さらにいえば、小学生の時、隣の町内の地藏盆に行くには、賽の神を越えるという意識があり、すごく勇気が必要だった。このように事務局で地藏盆の要素の抽出という作業をしてもらおうと、選定のイメージも分かりやすくなるのではないかな。

山路委員：提灯だけでなく、地口行燈も地藏盆の大きな要素だった。このごろはあまりないのだろうか。

事務局：この制度を分かりやすく言えば、放っておけば廃れてしまうような京都の良い風習や習わしを、みんなで価値をもう一度見つめ直して、魅力を味わいながら後世につないでいこうということだ。壬生寺さんは『地藏盆の手帖』というガイドブックを作っておられるので、これをお借りしながらウェブサイトで発信するといった、下支え的なことをするつもりである。

柿野委員長：連綿と続いている地藏盆は、委員はもとより、京都市民のほとんどの方の思い出でもあるし、これからも続けてほしいという願いは共通だろう。ぜひとも3弾目として選定にこぎ着きたい。次回は、今回のご意見を反映してたたき台を用意するので、忌憚のないご意見を願います。

(了)

「地蔵盆などの地域の伝統行事の現状と地域コミュニティ活性化への影響」

(2012年度「未来の京都創造研究事業」研究成果報告書より抜粋)